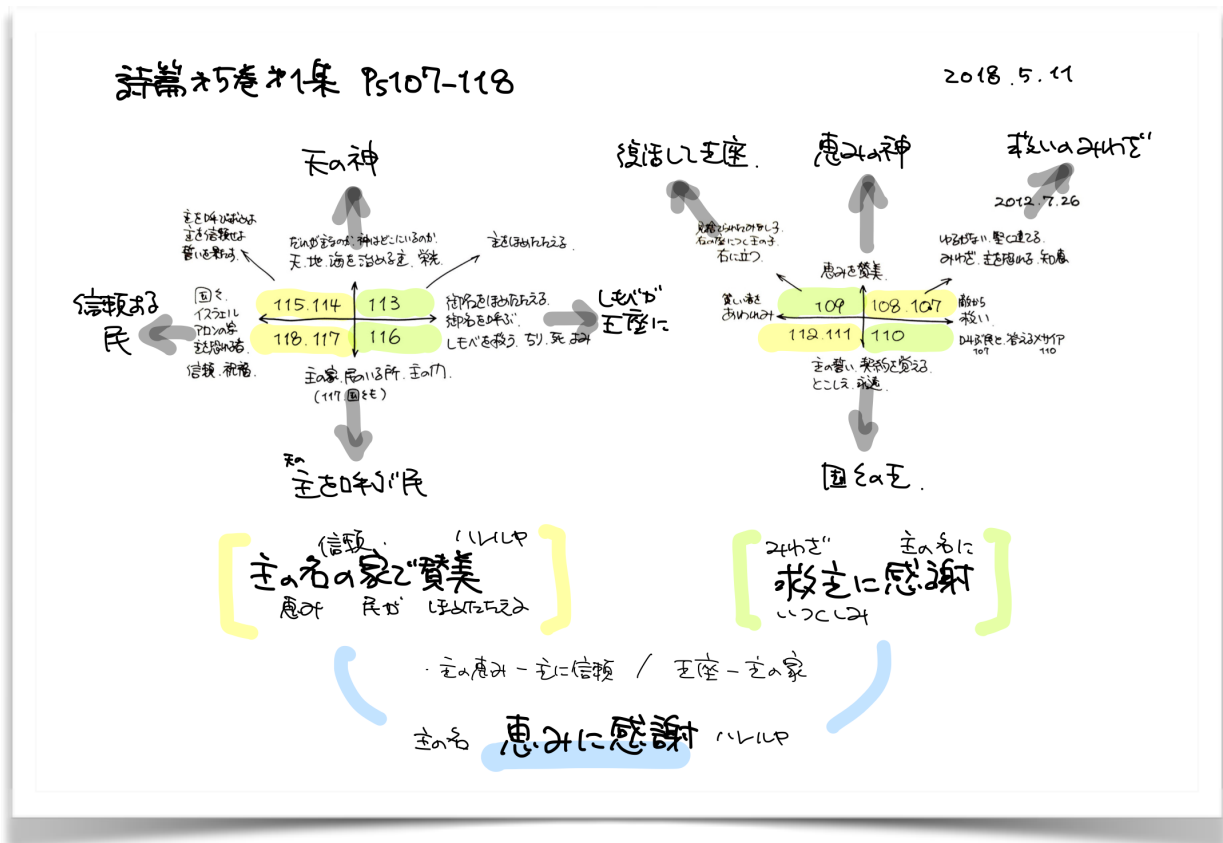




詩篇第5巻

詩篇107-118篇の配列構造



詩篇第5巻の第1集、107篇から118篇までの分析です。107篇から118篇。この分析は2012年7月のものがあります。その中に、出エジプト記の言い方、サムエル記、歴代誌、ルカ福音書やソロモンの祈りなどと比べているものもあります。分け方自体は、もう一度確かめていますけど、これでいいかなと思います。

107篇から112篇を4つに分けているのと、113篇から118篇までを4つに分けています。その区分については、前回のものの中に並行している箇所分類、題をつけたりしてはいますが、もう一度、最初の4つの段落、次の4つの段落、これのつながりを見ながら、全体を確かめました。

特に、前半は、バツテンのところ。「エジプトから救い出された、苦しみの中から叫んだら救われた」という107篇、108篇あたりと、111篇、112篇はアルファベット詩篇でセットですけど、こちらは、「主は恵み深くあわれみに富む」という主の名の宣言が両方とも入っている。出エジプト的ですねということです。

109篇は、苦しみの中、ラシオンハラアの攻撃に対して、主に信頼して救われて、主は貧しい者の右に立って救われるというところの109篇と、有名な110篇ですね。メサイヤが右の座につくという110篇。109篇の終わりと110篇の出だしが似ています。右の座に座っているということで、十字架と復活、昇天して右の座につく、というようなところがクロスの並行だろうということで、「救いのみわざ」と「復活して王座につく」。上の107篇、108篇、109篇は、恵み、恵み、恵み、口語訳だと、慈しみになっていま

すね。それが目立ちます。下は国々に対して王となっている。あわれみ深い王であるということです。この並行を見るかなと思います。113篇のほうは、それに対して、しもべが王座につくというような感じですね。高く上げられる。しもべの祈りを聞いて、主の大庭に入ってほめたたえます。しもべ、はしためという言い方があります。子を産まない女の並行がありますから、こちらの2つ、113篇と116篇は、しもべが王座にということです。

114篇、115篇、117篇、118篇。ここは、3回繰り返し同じ言い方が出てきます。イスラエルよ、アロンの家よ、主を恐れる者よ。盾である、盾である、盾である。家、家、家みたいなものとか、こういう3回の繰り返しが多く出てきて共通している感じです。こちらは、主に信頼しているという民が、神様の住まいに入っている。もしくはユダが神様の住まいとなっているという主の名のつけられている場所で、主の名がつけられている民が賛美しているというのが、この左側です。主の名の家で賛美します。しもべらが王座につく。

それと、上の113篇、114篇、115篇は天の神、天地を造られた神、天地、海の神という感じ。116篇、117篇、118篇は、それに対して主を呼ぶ。主を呼ぶ民、国々の上にいる民という感じ。主の名を呼ぶ、国民としての民の一致がここで言われていると思います。

それをまとめたのがこの紙です。前半107篇から112篇までは、救いのみわざ、救い主に感謝します。(後半)113篇から118篇は、主の名の家で民が賛美しますということで、主のほうに中心がいつている前半と、その主に救われた民が何をしているのか、何をすべきかということにフォーカスされているのが後半です。全体としては「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」というハレルヤを長く言ったもの。もしくは、その「主に感謝せよ…」からのところを短く言うのが、ハレルヤ。「ハレルヤ、アーメン。」という民の応答のことば。そのことばの中で、特に恵みに感謝するところから第5巻が始まっている。なぜなら、主は良い方というところが、119篇となってくるので、特に主にハレルヤと歌う詩篇群から第5巻が始まっているということは相応しいのだと思います。